

## スポーツ研究センター

## I 2018年度 大学評価委員会の評価結果への対応

## 【2018年度大学評価結果総評】(参考)

調査研究、学生の健康維持増進、体育施設の運営など、スポーツ研究センターの従前からの任務に加え、近年は体育会の強化、大学のイメージやプレゼンスの向上、社会や地域への貢献と還元なども任務や期待に加わり、スポーツ研究センターの重要性は年々増す一方で、所員の負担も増していると推察される。人的資源や予算も限られた厳しい環境下において、数多くの書籍や論文の執筆、放送への出演をこなしつつ、外部資金の獲得も精力的に行っていることは、バランスの取れた運営という点で多に評価できる。また、各種の公開講座も毎年継続して行っており、地域貢献の点でも評価できる。今後の動向を注視したい項目として、1. 質保証委員会の稼働、2. 所員間の協働、の2点を挙げ、また改善課題として、3. 情報発信、特にセンターホームページの充実、を挙げる。1. は2018年度の稼働開始が予定され、2. は中期目標・年度目標に掲げられている。3. については、例えば所員による新聞掲載やテレビ出演、大規模なセミナーや公開講座などの講演履歴をセンターホームページに掲載するだけでも効果があると思われるので何らかの対応を期待したい。

## 【2018年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】

昨年度の評価において、「情報発信」の充実について挙げられているが、この点については、研究センター運営委員会でホームページの全般的な運用について議論をし、今後の積極的な情報発信に繋がる方法を検討したい。

また所員間の協働については、体育会の強化を通じて段階的に始まっている。強化方法は常に変化が求められる作業であるため、今後はコミュニケーションを密に取りながら状況に合わせた適切な方法を積極的に模索していきたい。そして、現在携わっている体育会以外にもサポートを拡げる必要性があるため、更なる協働を促進したい。

## 【2018年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

スポーツ研究センターでは、2018年度大学評価結果総評において、数多くの書籍や論文の執筆、放送への出演、外部資金の獲得等、バランスの取れた運営が評価される一方、「情報発信、特にホームページの充実」という課題が指摘された。こちらについては、「今後の積極的な情報発信に繋がる方法を検討したい」とのことであるが、積極的な情報発信に向けて予算やホームページを管理する主体など具体的な議論が行われることを期待したい。また、動向を注視したい項目として挙げられた「所員間の協働」については体育会の強化を通じて段階的に始まっており今後の取り組みに注目したい。

## II 自己点検・評価

## 1 研究活動

## 【2019年5月時点における点検・評価】

## (1) 点検・評価項目における現状

1.1 研究所(センター)の理念・目的に基づき、研究・教育活動が適切に行われているか。

2018年度の活動状況について項目ごとに具体的に記入してください。

## ①研究・教育活動実績(プロジェクト、シンポジウム、セミナー等)

※2018年度に実施したプロジェクト、シンポジウム、セミナー等について、開催日、場所、テーマ、内容、参加者等の詳細を簡条書きで記入。

・2018年度は以下の10のプロジェクトを実施した。

- ①体力測定プロジェクト
- ②バレーボールのインストラクションにおけるポイントの整理
- ③競技レベル別にみた新体操選手の心理社会的スキルの獲得状況に関する検討
- ④スポーツ観戦者における観戦者知識と関与に関する研究
- ⑤大学スポーツが在校生における大学ブランド価値に与える影響に関する調査
- ⑥サッカーのキック時における注意の方向がフィールド調整能力に及ぼす影響
- ⑦大学生アスリートのドーピング意識は本当に低いのか?
- ⑧法政大学野球部在籍選手を対象としたコンディショニング指導の検証
- ⑨強度別伸張性サイクリング運動が骨格筋・心肺機能に及ぼす影響
- ⑩事前の有酸素性運動はレジスタンス運動後における血管内皮機能の低下を予防するか

これらのプロジェクトに関する報告会を開催し、意見交換を通じて所員間での研究に対する相互理解を促進した。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

・ワークショップの開催

体育会の強化報告を中心に、現在進行している強化プロセスの報告を行った。またそこで、今後の改善策に関する意見交換を行い、現場での取り組みに活かすように努めている。

【**根拠資料**】※ない場合は「特になし」と記入。

・【2018年研究プロジェクト】プロジェクト

②対外的に発表した研究成果（出版物、学会発表等）

※2018年度に刊行した出版物（発刊日、タイトル、著者、内容等）や実施した学会発表等（学会名、開催日、開催場所、発表者、内容等）の詳細を箇条書きで記入。

1. 書籍

- 『運動と疲労の科学』, 鴻崎香里奈・越智英輔・中里浩一, 2018年07月10日, 大修館書店, p.70-p.79, 第6章 運動誘発性の筋機能低下の特徴
- 『Nutrition and Enhanced Sports Performance』, E. Ochi, 2018-10-24, Academic Press, p.715-p.728, Chapter 62 Eicosapentaenoic Acid and Docosahexanoic Acid in Exercise Performance
- 『Extreme and Rare Sports: Performance Demands, Drivers, Functional Foods, and Nutrition』, E. Ochi and Y. Tsuchiya, 2019-03-31, CRC Press, p.321-p.340, Chapter 18 Skeletal Muscle Damage and Recovery from Eccentric Contractions
- 『進化する筋肉研究の新展開』, 越智英輔, 印刷中, 理工系図書出版, 第4章2節 筋損傷抑制するためのオメガ3脂肪酸の摂取について
- 『健康心理学の測定法・アセスメント』, 鈴木伸一・荒井弘和ほか, 2018年7月, ナカニシヤ出版, P.154-P.172, 担当箇所: 健康関連行動および認知の測定と評価
- 『鍼灸マッサージ師のためのスポーツ東洋療法』, 福林徹 監修, 2018年10月3日, 医道の日本社, P93-P96 アスレティックリハビリテーション, P97-P105 コンディショニング, P256-P257 スポーツ分野における頸部痛に対する鍼・マッサージ治療, P260-P262 スポーツ分野における腰痛に対する鍼・マッサージ治療, 以上 泉重樹 担当
- 『サッカー観戦者の関与と社会的影響について』 日本フットボール学会・第16回大会, 2018年12月23日, 順天堂大学(千葉県), 井上尊寛・吉田政幸・仲澤眞・岩村 聡・吉岡 那於子・片上 千恵・川田尚弘。

【背景】

スポーツが社会に与える影響について関心が高まっているが、理論的な枠組みや構成概念の検討および要因間の関係性の検証などに課題が残されている。

【目的】

本研究では、プロ・サッカークラブが社会に与えている影響について把握すること、観戦者やファンのチームに対する関与と社会的影響との関係について考察することを目的とした。

【方法】

2017シーズン、Jリーグ観戦者を対象とした質問紙調査(J1、2クラブ)を行い、886票のデータを収集し、分析を行った。

【結果】

プロ・サッカークラブが社会に与えている影響は、観戦者やファンの関与に影響を与え、様々な支援的な行動やCSRの評価に影響を与えることが示された。

【結論】

我が国において、スポーツ組織の社会に対して与えている影響を尺度化し測定した点、社会的影響とファンの関与や行動との影響を検証した点において、学術的にも現場にも価値のある知見をもたらすものである。

- 『チーム・アイデンティフィケーションとサッカー観戦：幸福感による媒介効果の検証』, 日本フットボール学会・第16回大会, 2018年12月23日, 順天堂大学(千葉県), 吉田政幸・井上尊寛・仲澤眞・岩村 聡・吉岡 那於子・片上 千恵。

【背景】

最近の変革的サービス研究によると、人々を幸福にすることが経済活動をさらに活性化させる。この視点は、サッカー観戦を通じた幸福感の向上が観戦行動をさらに促進させるという説明を可能にする。

【目的】

本研究は人々がサッカークラブに対して形成するチーム・アイデンティフィケーション（チームIDと略す）と観戦行動の因果関係の中で、サッカー観戦を通じた幸福感が持つ役割を明らかにする。

【方法】

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

Jリーグクラブのホームタウンの住民を対象として追跡調査を実施し、374票の有効回答を得た。

#### 【結果】

テレビ観戦とスタジアム観戦に影響を及ぼした要因はファンロイヤルティと呼ばれる継続的な忠誠心であり、チームIDと幸福感はこのファンロイヤルティを介して観戦行動に影響を与えた。

#### 【結論】

ファンロイヤルティがチームIDだけでなく、観戦を通じた幸福感によっても高められるという結果は、先行研究に対して新たな知見を加えるものである。

- 『Flexor pollicis brevis muscle provide another eccentric contraction model in human』, 65th American College of Sport Medicine, 2018-05-29, Hyatt Regency Minneapolis (Minneapolis, USA), K. Kouzaki, E. Ochi, and K. Nakazato
- 『2- and 4-week supplementations with  $\beta$ -Hydroxy-MethylButyrate (HMB) reduce eccentric exercise-induced muscle damage』, Nutrition 2018, 2018-06-10, the Hynes Convention Center (Boston, USA), Y. Tsuchiya, K. Hirayama, H. Ueda, and E. Ochi
- 『Fish oil supplementation inhibits the decrease in concentric work output and muscle swelling of the elbow flexors』, Nutrition 2018, 2018-06-10, the Hynes Convention Center (Boston, USA), E. Ochi, K. Yanagimoto, and Y. Tsuchiya
- 『Muscle memory with a rat climbing model』, 23rd Annual Congress of the European College of Sport Science, 2018-07-06, University College Dublin (UCD) and Ulster University (Dublin, Ireland), E. Eftestøl, I. Juvkam, E. Ochi, and K. Gundersen
- 『High-intensity resistance exercise with low repetitions maintains endothelial function』, Europhysiology 2018, 2018-09-14, QEII Centre (London, UK), T. Morishima, Y. Tsuchiya, M. Iemitsu, and E. Ochi  
高強度・低反復回数の筋力トレーニングは中強度・中反復回数の筋力トレーニングと異なり、血管内皮機能が低下しない(悪化しない)ことを明らかにした。
- 『Muscle memory with a rat climbing model』, Europhysiology 2018, 2018-09-14, QEII Centre (London, UK), E. Eftestøl, I. Juvkam, E. Ochi, and K. Gundersen
- 『Effect of supplementation with fish oil rich in eicosapentaenoic acid (EPA) and docosahexaenoic acid (DHA) on motor nerve function after eccentric contractions』, Europhysiology 2018, 2018-09-15, QEII Centre (London, UK), E. Ochi, K. Yanagimoto, and Y. Tsuchiya
- 『Eicosapentaenoic acid and docosahexaenoic acid on exercise performance』, 8th MBI International Symposium, 2018-10-26, China Medical University (Taichung, Taiwan), E. Ochi
- 『一過性の短縮性収縮トレーニングに伴う筋疲労に対するエイコサペンタエン酸の効果に関する研究』, 第7回日本トレーニング指導学会大会, 2018年12月8日, 大阪学院大学(大阪府), 柳本賢一・土屋陽祐・森嶋琢真・越智英輔
- 『バレーボールの様々なディグ場面におけるシチュエーション』, 日本バレーボール学会第24回大会, 2019年3月2日・3日, 山梨学院大学(山梨県), 村田勇人・吉田康伸・山田快
- 『Consumer experience quality in participant sports: An empirical examination of a Japanese marathon event』 The 26th conference of the European Association for Sport Management, 2018年9月, Malmö, Sweden, Yamaguchi, S., & Yoshida, M., マラソンイベントにおけるコンシューマー・エクスペリエンスの検証。
- 『Bridging the gap between social media and behavioral team loyalty: The mediating role of team-related social media engagement』 The 33rd Conference of the North American Society for Sport Management, Halifax, Nova Scotia, Canada, 2018年6月, Yoshida, M., Gordon, B., Nakazawa, M., Shibuya, S., & Fujiwara, N., プロスポーツにおけるソーシャルメディアの活用とそれを通じたブランドロイヤルティの向上の検証。
- 『Service quality and its consequences: An integrative review and analysis of the literature in spectator sports』 The 33rd Conference of the North American Society for Sport Management, Halifax, Nova Scotia, Canada, 2018年6月, Biscaia, R., Yoshida, M., & Kim, Y., 観戦型スポーツイベントのサービスクオリティに関する文献の統合的レビュー。
- 『大学生アスリートのスポーツ・ライフ・バランスはウェル・ビーイングと関連する』, 日本スポーツ心理学会・45回大会, 2018年10月13日, (愛知県), 荒井弘和・深町花子・鈴木郁弥・榎本恭介
- 『子どもの体力向上に向けた教育委員会の取り組み実態: 教育委員会保健体育課に属する指導主事へのインタビュー調査から』, 日本体育学会・第69回大会, 2018年8月24日, 徳島大学(徳島県), 山田 稔・西嶋尚彦・末永祐介・林 容

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

市・山田 快・田原康寛，学校現場における子どもの体力向上に関する取り組みについて，教育委員会保健体育課がどのような評価・計画・実践を行っているか実態調査を行った。

- 『コーチはいかにしてチームの一体感を高めるか』，日本スポーツ心理学会・第45回大会，2018年10月14日，名古屋国際会議場（愛知県），山田 快，アスリートがチームの一体感を高める上で有効と捉えている方策を調査し，質的に検討した。
- 『大学生アスリートを対象とした脳震盪経験の実態調査』，泉 重樹，鈴木郁弥，荒井弘和，第72回日本体力医学会大会，福井市，2018年9月7-9日
- 『競技レベル別にみた新体操選手のパーソナリティの比較—団体種目を専門とする女子選手を対象者して—』，日本体育学会第69回大会，2018年8月24日，徳島大学（徳島県），中澤 史・梶内大輝・小野田桂子，新体操選手のパーソナリティについて競技レベルに着目して検討した。
- 『競技レベル別にみた新体操選手の社会的スキルの検討—団体種目を専門とする女子選手を対象者して—』，日本体育学会第69回大会，2018年8月24日，徳島大学（徳島県），梶内大輝・中澤 史・小野田桂子，新体操選手の社会的スキルについて競技レベルに着目して検討した。
- 『年代別にみた新体操選手のパーソナリティの特徴』，日本スポーツ心理学会第45回大会，2018年10月14日，名古屋国際会議場（愛知県），中澤 史・上野雄己・梶内大輝・佐藤友哉，新体操選手のパーソナリティについて年代に着目して検討した。
- 『代別にみた新体操選手の心理的競技能力の特徴』，日本スポーツ心理学会第45回大会，2018年10月14日，名古屋国際会議場（愛知県），梶内大輝・上野雄己・佐藤友哉・中澤 史，新体操選手の心理的競技能力について年代に着目して検討した。
- 『中学生サッカー選手のパーソナリティ特性に関する検討—ポジションに着目して—』，日本スポーツ心理学会第45回大会，2018年10月14日，名古屋国際会議場（愛知県），松岡悠太・中澤 史，中学生のサッカー選手のパーソナリティについてポジションに着目して検討した。
- 『学年別にみたソフトテニス選手のパーソナリティの特徴』，日本スポーツ心理学会第45回大会，2018年10月14日，名古屋国際会議場（愛知県），佐藤友哉・上野雄己・梶内大輝・中澤 史，学年別にみたソフトテニス選手のパーソナリティについて検討した。
- 『中学生サッカー選手のパーソナリティ特性に関する検討—ポジションに着目して—』，九州スポーツ心理学会第32回大会，2019年3月10日，天文館ビジョンホール（鹿児島県），松岡悠太・中澤 史，中学生のサッカー選手のパーソナリティについてポジションに着目して検討した。
- 『高校運動部員用礼儀マナー尺度の開発』，九州スポーツ心理学会第32回大会，2019年3月10日，天文館ビジョンホール（鹿児島県），梶内大輝・上野雄己・島本好平・中澤 史，高校生の運動部員を対象とした礼儀マナー尺度の開発を試みた。
- 『ソフトテニス選手のサーブ時のルーティンワークと心理的側面の関係』，九州スポーツ心理学会第32回大会，2019年3月10日，天文館ビジョンホール（鹿児島県），佐藤友哉・上野雄己・梶内大輝・中澤 史，ソフトテニス選手が用いるサーブ時のルーティンワークが及ぼす心理的効果について検討した。
- 『外的負荷の伴う条件下における肘関節角度調節能に関する検討』，第73回日本体力医学会大会，2018年9月9日，福井市総合ボランティアセンター（福井県），若田部舜，林容市。  
内容：主観に基づき目標角度に合わせて肘関節屈曲動作を行った場合，利き手・非利き手に関係なく，目標角度が小さいほど外的負荷の影響を受け，筋出力に伴う努力感覚に差異が生じる可能性が示唆された。
- 『表象を伴う予測的姿勢制御を運動指導現場で捉える』，日本体育測定評価学会第18回大会，札幌国際大学（北海道），村山敏夫，坂口雄介，亀岡雅紀，尾山裕介，林容市。  
内容：平坦な状況を映し出した映像の視聴と視野の遮断の二つの条件下で模擬歩行をさせ，歩行面の傾斜を変化させた場合，平坦な状況の映像を試聴中において視野遮断の条件よりも姿勢制御が生じる傾斜角が大きく，予測的な姿勢制御が表象に大きく影響を受ける可能性が示唆された。
- 『子どもの体力向上に向けた教育委員会の取り組み実態—教育委員会保健体育課に属する指導主事へのインタビュー調査から』，日本体育学会第69回大会，徳島大学（徳島県），山田稔，西嶋尚彦，末永祐介，林容市，山田快，田原康寛。  
内容：4県の教育委員会保健体育課に属する指導主事6名を対象に，児童・生徒の体力向上に向けて実施している評価・計画等について調査した結果，学校現場に対するアプローチの方法に関する視点や考え方における相違の存在，保健体育課と他課との連携上の課題の存在が示唆された。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し，回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は，前年度から「S：さらに改善した，A：従来通り，B：改善していない」を意味する。

## 2. 論文

- 『プロテイン粉末の摂取が大学野球選手の身体組成に及ぼす影響』, 佐藤みほ香・杉本恵子・伊藤マモル, 2019年3月, 法政大学スポーツ研究センター紀要 第37号 pp.41-47,  
大学体育会アスリートに対する栄養・食事指導の教育的観点から、摂取量を適切にコントロールしたプロテイン粉末の摂取が身体組成、運動機能および運動後の疲労感に及ぼす影響を明らかにすることを目的に2種類のプロテイン粉末の効果を1ヵ月摂取後の身体組成の変化、運動機能向上および運動後の疲労感軽減を比較した。  
その結果、DNA群では摂取前後でミネラル量のみ有意な低下が認められ、WHEY100群では水分量、たんぱく量、ミネラル量、骨格筋量で有意な低下、体脂肪量で有意な上昇が認められた。また、健康関連QOL (HRQOL: Health Related Quality of Life) の指標であるSF36-v2 アンケートの結果では、10項目中「FP (日常的役割機能; 身体)」「GH (全身的健康感)」「FP (活力)」「SF (社会的な生活機能)」「RE (日常的役割機能; 精神)」「MCS (精神的側面のQOL)」「RCS (社会的側面のQOL)」の7項目でDNA摂取群の方が高得点を示した。その中でも「GH (全身的健康感)」は有意に高い値を認めた。以上のことから、DNAの摂取は、大学生野球選手の身体組成維持や健康関連QOL向上にWHEY100よりも貢献する可能性を示唆した。
- 『指椎間距離測定を用いた大学野球選手の肩関節可動域の特徴』, 伊藤マモル・森嶋琢真・越智英輔・植田 央・土屋陽祐・由井嶺太・矢内智也・山本利春, 2019年3月, 法政大学スポーツ研究センター紀要 第37号 pp.49-55,  
本研究の目的は、肩関節可動域の機能評価を簡便に行える方法として一般化している指椎間距離測定 (以下、FVDM) を用いて、大学野球トップアスリートを対象に投球側肩および非投球側肩の関節可動域を比較するとともに、シーズン前とシーズン後の変化からその特徴を確認することであった。  
その結果、1) 投球側肩の関節可動域は非投球側よりも有意に低いという特徴が認められた。2) 肩関節外転外旋動作および伸展内旋動作ともに関節可動域が有意に狭いという特徴が認められた。3) ポジション別では投手の柔軟性が最も良いという特徴が認められた。その反面、シーズン前後の変化率では投手のFVDM値が最も悪化し、内野手にも同様な傾向が認められた。  
以上の点からFVDMで得られたデータは先行研究と同様な検討を行うために有効であったことが確認された。
- 『スタジアムにおけるスポーツ観戦関与』井上尊寛・松岡宏高・吉田政幸・蔵榎利恵子, 2018年12月15日, 日本スポーツマネジメント学会, P.41- P.58.  
スポーツマネジメントにおいて、スポーツ観戦者を対象としたスポーツ関与に着目した研究は少ない。したがって、スポーツ観戦者の消費行動をより詳細に解明するためにもスポーツ関与を用いた研究は重要である。本研究では、1) スタジアム観戦者のスポーツ観戦関与に着目し、測定尺度の信頼性、妥当性、および要因間の次元性と階層性を検討すること、2) スポーツ観戦関与と結果要因の関係性について検討することを目的として設定した。分析にプロ・サッカーチームおよびプロ野球の観戦者から収集した892サンプルを用いた。確認的因子分析の結果、5要因にて構成されるスポーツ観戦関与の尺度の妥当性および信頼性が確認された。さらに、要因間の関係性や結果要因との関係についても新たな示唆が得られた。
- 『大学生柔道選手におけるライフスキル獲得が競技成績に及ぼす影響』, 山本浩二・垣田恵佑・島本好平・永木耕介, 2018年12月, 武道学研究 Vol. 51, No. 2, pp. 75-88.  
本研究は、大学柔道選手を対象とし、ライフスキルの獲得が競技成績に及ぼす影響について、12大学・537名を対象に「大学生アスリート用ライフスキル評価尺度」による調査を行い、次の結果を得た。競技成績上位群は「目標設定」「考える力」「コミュニケーション」「最善の努力」「責任ある行動」等が競技成績下位群よりも有意に高く、このことは、日常生活場面における行動が競技成績や能力に影響を与えるという他種目における結果を支持するものであった。
- 『Eicosapentaenoic acid (EPA) and docosahexaenoic acid (DHA) in muscle damage and function』, E. Ochi and Y. Tsuchiya, 2018-04-29, Nutrients, 10(5), p. 552-p. 564
- 『Seasonal variations of bone metabolism and bone mineral density in collegiate alpine skiers』, T. Sato, K. Sakuraba, Y. Tsuchiya, S. Maruyama, and E. Ochi, 2018-05, Journal of Strength and Conditioning Research, 32(5), p. 1448-p. 1454
- 『Higher training frequency is important for gaining muscular strength under volume-matched training』, E. Ochi, M. Maruo, Y. Tsuchiya, N. Ishii, K. Miura, and K. Sasaki, 2018-07-02, Frontiers in Physiology, 9, p. 744-p. 751
- 『Contralateral repeated bout effect after eccentric exercise on muscular activation』, Y. Tsuchiya, K. Nakazato, and E. Ochi, 2018-09, European Journal of Applied Physiology, 118(9), p. 1997-p. 2005
- 『High-intensity resistance exercise with low repetitions maintains endothelial function』, T. Morishima,

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

Y. Tsuchiya, M. Iemitsu, and E. Ochi, 2018-08-31, American Journal of Physiology-Heart and Circulatory Physiology, 315(3), p.681-p.686

高強度・低反復回数の筋力トレーニングは中強度・中反復回数の筋力トレーニングと異なり、血管内皮機能が低下しない（悪化しない）ことを明らかにした。

- 『Eicosapentaenoic acid-rich fish oil supplementation inhibits the decrease in concentric work output and muscle swelling of the elbow flexors』, E. Ochi, K. Yanagimoto, T. Morishima, and Y. Tsuchiya, 2018-09-27, Journal of the American College of Nutrition, 38(2), p.125-p.131  
8週間にわたる n-3 系脂肪酸の摂取は、短縮性筋収縮時における筋疲労を軽減することを明らかにした。
- 『Two and four weeks of b-Hydroxy-b-Methylbutyrate (HMB) supplementations reduce muscle damage following eccentric contractions』, Y. Tsuchiya, K. Hirayama, H. Ueda, and E. Ochi, 2018-12-27, Journal of the American College of Nutrition, p.1-p.7
- 『Muscular recruitment is associated with muscular function and swelling following eccentric contractions of human elbow flexors』, Y. Tsuchiya, H. Ueda, and E. Ochi, in press (2019) The Journal of Sports Medicine and Physical Fitness, in press
- 『Physical characteristics and fitness in elite collegiate baseball players in Japan: Comparison of pitchers vs. fielders』, T. Morishima, M. Ito, Y. Tsuchiya, H. Ueda, and E. Ochi, in press (2019), Gazzetta Medica Italiana, in press  
大学野球選手の体力特性を投手と野手で比較した。その結果、筋力、伸長-短縮サイクル、無酸素性持久力は野手が優れる一方、肩関節の可動域は投手が優れる（広い）ことが明らかにした。
- 『Supplementation of eicosapentaenoic acid-rich fish oil attenuates muscle stiffness after eccentric contractions of human elbow flexors』, Y. Tsuchiya, K. Yanagimoto K, H. Ueda, and E. Ochi, in press (2019), Journal of the International Society of Sports Nutrition, in press
- 『チーム・アイデンティフィケーション：理論的再検証』（原著論文），出口順子・辻洋右・吉田政幸，2018年12月，スポーツマネジメント研究，10(1)：19-40，スポーツ観戦者が応援するチームに対して形成するチーム・アイデンティフィケーションと呼ばれる心理的結びつきの理論的検証。
- 『スタジアムにおけるスポーツ観戦関与』（原著論文），井上尊寛・松岡宏高・吉田政幸・蔵樹利恵子，2018年12月，スポーツマネジメント研究，10(1)：41-58，スポーツ観戦者がスタジアム観戦に対して形成する心理的な関わりの強さの検証。
- 『Ignition tradition? A case study of the Florida State University Athletics Department’s 2014 logo redesign』（原著論文），Hedlund, D.P., Gordon, B.S., Yoshida, M., & Germain, J.S., 2018年8月，Journal of Applied Sport Management, 10(3)：1-14，フロリダ州立大学の大学スポーツのロゴの変更に関する事例研究。
- 『Professional sport teams and fan loyalty programs: A Perceived value perspective』（原著論文），Yoshida, M., Gordon, B.S., & Hedlund, D.P., 2018年8月，International Journal of Sport Management, 19(3)：235-261，プロスポーツチームのファンクラブにおいて会員が獲得する価値の検証。
- 『Bridging the gap between social media and behavioral brand loyalty』（原著論文），Yoshida, M., Gordon, B.S., Nakazawa, M., Shibuya, S., & Fujiwara, N., 2018年4月，Electronic Commerce Research and Applications, 28(2)：208-218，プロスポーツにおけるソーシャルメディアの活用とそれを通じたブランドロイヤルティの向上の検証。
- 『大学生アスリートのスポーツ・ライフ・バランスに関連する要因—デュアルキャリアの実現に向けて—』, 荒井弘和・深町花子・鈴木郁弥・榎本恭介, 2018年4月，スポーツ産業学研究 28, P.149-P.161,
- 『アスリートの抱える心身医学的問題とその支援』, 荒井弘和, 2019年1月，心身医学 59, P.15-P.21,
- 『大学生アスリートの注意欠如・多動症状と脳震盪の関連』, 金澤潤一郎・榎本恭介・鈴木郁弥・荒井弘和, 2019年1月，心身医学 59, P.47-P.51,
- 『バレーボールが持っている魅力の可視化』, 山田 快・榎本恭介・荒井弘和, 2018年9月14日（受理），バレーボール研究・第21巻第1号 印刷中，バレーボールに携わった経験のある者からバレーボールの魅力を抽出し，整理した。
- 『新体操競技選手の柔軟性調査』, 小野田桂子・泉 重樹, 東京女子体育大学東京女子体育短期大学紀要. (53), 131-134, 2018
- 『新体操選手の心理特性に関する検討』, 中澤 史・神谷玲伊奈・博田広樹・土屋有羽・梶内大輝・佐藤友哉・上野雄己・小野田桂子, 2019年3月31日，法政大学スポーツ研究センター紀要 37巻, P1-P10, 団体種目を専門とする新体操選手の心理特性についてパーソナリティ，心理的競技能力，社会的スキルの観点から検討した。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順的な点検項目に適用し，回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は，前年度から「S：さらに改善した，A：従来通り，B：改善していない」を意味する。

- 『ジュニアサッカー選手のパーソナリティに関する研究—競技レベル, 学年, ポジションに着目して—』, 伊東未来・松岡悠太・高橋和之・上野雄己・中澤 史, 2019年3月31日, 法政大学スポーツ研究センター紀要 37 巻, P11-P18, ジュニアサッカー選手のパーソナリティについて競技レベル, 学年, ポジションの観点から検討した。
  - 『中学生サッカー選手のパーソナリティに関する研究—ポジションに着目して—』, 松岡悠太・中澤 史, 2019年3月31日, 法政大学スポーツ研究センター紀要 37 巻, P19-P24, 中学生のサッカー選手のパーソナリティについてポジションに着目して検討した。
  - 『Psycho-physiology of elite athletes』, 粕谷泰造・中澤 史, 法政大学スポーツ研究センター紀要 37 巻, P25-P30, トップアスリートの心理生理学的特性について概観した。
  - 『日本人男性一流競技者における除脂肪量指数 (FFMI) および脂肪量指数 (FMI) の競技種目差』, 勝亦陽一、設楽佳世、熊川大介、袴田智子、中里浩介、池田達昭、平野裕一、トレーニング科学、29(4):317-327, 2018。
  - 『就学段階ごとの運動経験が大学生における把握の調整力に及ぼす影響』, 林容市・高橋信二・速水達也, 2019年3月, 体育測定評価研究 18 P. 35-P. 46。  
内容: 就学前, 小学校低学年, 小学校高学年, 中学校, 高校および大学生 (現在) の各就学段階における運動経験・運動量と把握の調整力との関係性を検討した。その結果, 小学校低学年において高い運動量を有していた学生ほど, 握力の調整能力が高いことを示した。
3. 学会発表
- 『サッカー観戦者の関与と社会的影響について』 日本フットボール学会・第 16 回大会, 2018年12月23日, 順天堂大学(千葉県), 井上尊寛・吉田政幸・仲澤眞・岩村 聡・吉岡 那於子・片上 千恵・川田尚弘。  
【背景】  
スポーツが社会に与える影響について関心が高まっているが、理論的な枠組みや構成概念の検討および要因間の関係性の検証などに課題が残されている。  
【目的】  
本研究では、プロ・サッカークラブが社会に与えている影響について把握すること、観戦者やファンのチームに対する関与と社会的影響との関係について考察することを目的とした。  
【方法】  
2017 シーズン、J リーグ観戦者を対象とした質問紙調査 (J1、2 クラブ) を行い、886 票のデータを収集し、分析を行った。  
【結果】  
プロ・サッカークラブが社会に与えている影響は、観戦者やファンの関与に影響を与え、様々な支援的な行動や CSR の評価に影響を与えることが示された。  
【結論】  
我が国において、スポーツ組織の社会に対して与えている影響を尺度化し測定した点、社会的影響とファンの関与や行動との影響を検証した点において、学術的にも現場にも価値のある知見をもたらすものである。
  - 『チーム・アイデンティフィケーションとサッカー観戦：幸福感による媒介効果の検証』, 日本フットボール学会・第 16 回大会, 2018年12月23日, 順天堂大学(千葉県), 吉田政幸・井上尊寛・仲澤眞・岩村 聡・吉岡 那於子・片上 千恵。  
【背景】  
最近の変革的サービス研究によると、人々を幸福にすることが経済活動をさらに活性化させる。この視点は、サッカー観戦を通じた幸福感の向上が観戦行動をさらに促進させるという説明を可能にする。  
【目的】  
本研究は人々がサッカークラブに対して形成するチーム・アイデンティフィケーション (チーム ID と略す) と観戦行動の因果関係の中で、サッカー観戦を通じた幸福感が持つ役割を明らかにする。  
【方法】  
J リーグクラブのホームタウンの住民を対象として追跡調査を実施し、374 票の有効回答を得た。  
【結果】  
テレビ観戦とスタジアム観戦に影響を及ぼした要因はファンロイヤルティと呼ばれる継続的な忠誠心であり、チーム ID と幸福感はこのファンロイヤルティを介して観戦行動に影響を与えた。  
【結論】  
ファンロイヤルティがチーム ID だけでなく、観戦を通じた幸福感によっても高められるという結果は、先行研究に対して新たな知見を加えるものである。
  - 『Flexor pollicis brevis muscle provide another eccentric contraction model in human』, 65th American College

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

- of Sport Medicine, 2018-05-29, Hyatt Regency Minneapolis (Minneapolis, USA), K. Kouzaki, E. Ochi, and K. Nakazato
- 『2- and 4-week supplementations with  $\beta$ -Hydroxy-MethylButyrate (HMB) reduce eccentric exercise-induced muscle damage』, Nutrition 2018, 2018-06-10, the Hynes Convention Center (Boston, USA), Y. Tsuchiya, K. Hirayama, H. Ueda, and E. Ochi
  - 『Fish oil supplementation inhibits the decrease in concentric work output and muscle swelling of the elbow flexors』, Nutrition 2018, 2018-06-10, the Hynes Convention Center (Boston, USA), E. Ochi, K. Yanagimoto, and Y. Tsuchiya
  - 『Muscle memory with a rat climbing model』, 23rd Annual Congress of the European College of Sport Science, 2018-07-06, University College Dublin (UCD) and Ulster University (Dublin, Ireland), E. Eftestøl, I. Juvkam, E. Ochi, and K. Gundersen
  - 『High-intensity resistance exercise with low repetitions maintains endothelial function』, Europhysiology 2018, 2018-09-14, QEII Centre (London, UK), T. Morishima, Y. Tsuchiya, M. Iemitsu, and E. Ochi  
高強度・低反復回数の筋力トレーニングは中強度・中反復回数の筋力トレーニングと異なり、血管内皮機能が低下しない(悪化しない)ことを明らかにした。
  - 『Muscle memory with a rat climbing model』, Europhysiology 2018, 2018-09-14, QEII Centre (London, UK), E. Eftestøl, I. Juvkam, E. Ochi, and K. Gundersen
  - 『Effect of supplementation with fish oil rich in eicosapentaenoic acid (EPA) and docosahexaenoic acid (DHA) on motor nerve function after eccentric contractions』, Europhysiology 2018, 2018-09-15, QEII Centre (London, UK), E. Ochi, K. Yanagimoto, and Y. Tsuchiya
  - 『Eicosapentaenoic acid and docosahexaenoic acid on exercise performance』, 8th MBI International Symposium, 2018-10-26, China Medical University (Taichung, Taiwan), E. Ochi
  - 『一過性の短縮性収縮トレーニングに伴う筋疲労に対するエイコサペンタエン酸の効果に関する研究』, 第7回日本トレーニング指導学会大会, 2018年12月8日, 大阪学院大学(大阪府), 柳本賢一・土屋陽祐・森嶋琢真・越智英輔
  - 『バレーボールの様々なディグ場面におけるシチュエーション』, 日本バレーボール学会第24回大会, 2019年3月2日・3日, 山梨学院大学(山梨県), 村田勇人・吉田康伸・山田快
  - 『Consumer experience quality in participant sports: An empirical examination of a Japanese marathon event』 The 26th conference of the European Association for Sport Management, 2018年9月, Malmö, Sweden, Yamaguchi, S., & Yoshida, M., マラソンイベントにおけるコンシューマー・エクスペリエンスの検証。
  - 『Bridging the gap between social media and behavioral team loyalty: The mediating role of team-related social media engagement』 The 33rd Conference of the North American Society for Sport Management, Halifax, Nova Scotia, Canada, 2018年6月, Yoshida, M., Gordon, B., Nakazawa, M., Shibuya, S., & Fujiwara, N., プロスポーツにおけるソーシャルメディアの活用とそれを通じたブランドロイヤルティの向上の検証。
  - 『Service quality and its consequences: An integrative review and analysis of the literature in spectator sports』 The 33rd Conference of the North American Society for Sport Management, Halifax, Nova Scotia, Canada, 2018年6月, Biscaia, R., Yoshida, M., & Kim, Y., 観戦型スポーツイベントのサービスクオリティに関する文献の統合的レビュー。
  - 『大学生アスリートのスポーツ・ライフ・バランスはウェル・ビーイングと関連する』, 日本スポーツ心理学会・45回大会, 2018年10月13日, (愛知県), 荒井弘和・深町花子・鈴木郁弥・榎本恭介
  - 『子どもの体力向上に向けた教育委員会の取り組み実態: 教育委員会保健体育課に属する指導主事へのインタビュー調査から』, 日本体育学会・第69回大会, 2018年8月24日, 徳島大学(徳島県), 山田 稔・西嶋尚彦・末永祐介・林 容市・山田 快・田原康寛, 学校現場における子どもの体力向上に関する取り組みについて, 教育委員会保健体育課がどのような評価・計画・実践を行っているか実態調査を行った。
  - 『コーチはいかにしてチームの一体感を高めるか』, 日本スポーツ心理学会・第45回大会, 2018年10月14日, 名古屋国際会議場(愛知県), 山田 快, アスリートがチームの一体感を高める上で有効と捉えている方策を調査し, 質的に検討した。
  - 『大学生アスリートを対象とした脳震盪経験の実態調査』, 泉 重樹, 鈴木郁弥, 荒井弘和, 第72回日本体力医学会大会, 福井市, 2018年9月7-9日
  - 『競技レベル別にみた新体操選手のパーソナリティの比較-団体種目を専門とする女子選手を対象者して-』, 日本体育

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

学会第 69 回大会, 2018 年 8 月 24 日, 徳島大学 (徳島県), 中澤 史・梶内大輝・小野田桂子, 新体操選手のパーソナリティについて競技レベルに着目して検討した。

- 『競技レベル別にみた新体操選手の社会的スキルの検討—団体種目を専門とする女子選手を対象として—』, 日本体育学会第 69 回大会, 2018 年 8 月 24 日, 徳島大学 (徳島県), 梶内大輝・中澤 史・小野田桂子, 新体操選手の社会的スキルについて競技レベルに着目して検討した。
- 『年代別にみた新体操選手のパーソナリティの特徴』, 日本スポーツ心理学会第 45 回大会, 2018 年 10 月 14 日, 名古屋国際会議場 (愛知県), 中澤 史・上野雄己・梶内大輝・佐藤友哉, 新体操選手のパーソナリティについて年代に着目して検討した。
- 『年代別にみた新体操選手の心理的競技能力の特徴』, 日本スポーツ心理学会第 45 回大会, 2018 年 10 月 14 日, 名古屋国際会議場 (愛知県), 梶内大輝・上野雄己・佐藤友哉・中澤 史, 新体操選手の心理的競技能力について年代に着目して検討した。
- 『中学生サッカー選手のパーソナリティ特性に関する検討—ポジションに着目して—』, 日本スポーツ心理学会第 45 回大会, 2018 年 10 月 14 日, 名古屋国際会議場 (愛知県), 松岡悠太・中澤 史, 中学生のサッカー選手のパーソナリティについてポジションに着目して検討した。
- 『学年別にみたソフトテニス選手のパーソナリティの特徴』, 日本スポーツ心理学会第 45 回大会, 2018 年 10 月 14 日, 名古屋国際会議場 (愛知県), 佐藤友哉・上野雄己・梶内大輝・中澤 史, 学年別にみたソフトテニス選手のパーソナリティについて検討した。
- 『中学生サッカー選手のパーソナリティ特性に関する検討—ポジションに着目して—』, 九州スポーツ心理学会第 32 回大会, 2019 年 3 月 10 日, 天文館ビジョンホール (鹿児島県), 松岡悠太・中澤 史, 中学生のサッカー選手のパーソナリティについてポジションに着目して検討した。
- 『高校運動部員用礼儀マナー尺度の開発』, 九州スポーツ心理学会第 32 回大会, 2019 年 3 月 10 日, 天文館ビジョンホール (鹿児島県), 梶内大輝・上野雄己・島本好平・中澤 史, 高校生の運動部員を対象とした礼儀マナー尺度の開発を試みた。
- 『ソフトテニス選手のサーブ時のルーティンワークと心理的側面の関係』, 九州スポーツ心理学会第 32 回大会, 2019 年 3 月 10 日, 天文館ビジョンホール (鹿児島県), 佐藤友哉・上野雄己・梶内大輝・中澤 史, ソフトテニス選手が用いるサーブ時のルーティンワークが及ぼす心理的効果について検討した。
- 『外的負荷の伴う条件下における肘関節角度調節能に関する検討』, 第 73 回日本体力医学会大会, 2018 年 9 月 9 日, 福井市総合ボランティアセンター (福井県), 若田部舜, 林容市.  
内容: 主観に基づき目標角度に合わせて肘関節屈曲動作を行った場合, 利き手・非利き手に関係なく, 目標角度が小さいほど外的負荷の影響を受け, 筋出力に伴う努力感覚に差異が生じる可能性が示唆された。
- 『表象を伴う予測的姿勢制御を運動指導現場で捉える』, 日本体育測定評価学会第 18 回大会, 札幌国際大学 (北海道), 村山敏夫, 坂口雄介, 亀岡雅紀, 尾山裕介, 林容市.  
内容: 平坦な状況を映し出した映像の視聴と視野の遮断の二つの条件下で模擬歩行をさせ, 歩行面の傾斜を変化させた場合, 平坦な状況の映像を試聴中において視野遮断の条件よりも姿勢制御が生じる傾斜角が大きく, 予測的な姿勢制御が表象に大きく影響を受ける可能性が示唆された。
- 『子どもの体力向上に向けた教育委員会の取り組み実態—教育委員会保健体育課に属する指導主事へのインタビュー調査から』, 日本体育学会第 69 回大会, 徳島大学 (徳島県), 山田稔, 西嶋尚彦, 末永祐介, 林容市, 山田快, 田原康寛.  
内容: 4 県の教育委員会保健体育課に属する指導主事 6 名を対象に, 児童・生徒の体力向上に向けて実施している評価・計画等について調査した結果, 学校現場に対するアプローチの方法に関する視点や考え方における相違の存在, 保健体育課と他課との連携上の課題の存在が示唆された。

#### 4. 研究プロジェクト、セミナー、シンポジウムへの参加

- (プロジェクト) 『2018 年度法政大学スポーツ研究センター研究プロジェクト』, 2018 年 4 月 1 日—2019 年 3 月 31 日, 法政大学 (東京都), テーマ: バレーボールのインストラクションにおけるポイントの整理, 内容: バレーボールへの参画を動機づけるインストラクション上, 考慮すべきポイントを洗い出し, 整理した。山田快
- (プロジェクト) 『2018 年度法政大学スポーツ研究センター研究プロジェクト』, 2018 年 8 月 1 日—2018 年 8 月 31 日, 法政大学 (東京都), 事前の有酸素性運動が筋力トレーニング後における血管内皮機能に及ぼす影響  
事前の有酸素性運動が筋力トレーニングに伴う血管内皮機能の低下を予防するか否かを検討した。その結果, 事前の有酸素性運動では筋力トレーニング後における血管内皮機能を予防できないことが明らかになった。

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順的な点検項目に適用し, 回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は, 前年度から「S: さらに改善した, A: 従来通り, B: 改善していない」を意味する。

本研究の成果は2019年4月にEuropean Journal of Applied Physiologyに原著論文として掲載された。森嶋琢真・越智英輔

- (プロジェクト)『2018年度法政大学スポーツ研究センター研究プロジェクト』, 2018年9月1日～2018年10月31日、法政大学(東京都)、n-3系脂肪酸の摂取が筋持久力や血管内皮機能に及ぼす影響  
n-3系脂肪酸の摂取が筋持久力や血管内皮機能に及ぼす影響を検討した。その結果、8週間にわたるn-3系脂肪酸の摂取は、①座位後における血管内皮機能の低下を予防できないこと、②筋持久力を改善できないことが明らかになった。  
本研究の成果はApplied Physiology, Nutrition and MetabolismおよびNutrientsに投稿した(現在査読中)。越智英輔・森嶋琢真
- (プロジェクト)『2018年度法政大学スポーツ研究センター研究プロジェクト』, 2019年3月1日～2019年3月31日、法政大学(東京都)、体力レベルの相違が座位後における血管内皮機能に及ぼす影響  
座位後における血管内皮機能の変化を運動習慣のない被験者と自転車競技部に所属する被験者で比較した。その結果、運動習慣のない被験者は3時間の座位後に血管内皮機能が低下するが、体力レベルの高い自転車競技部所属の被験者では低下しないことが明らかになった。  
本研究の成果はScandinavian Journal of Medicine and Science in Sportsに投稿した(現在査読中)。森嶋琢真・越智英輔
- (講演・セミナー)『嘉納治五郎から学ぶ 連続講座』(主催:一般財団法人嘉納治五郎記念国際スポーツ研究・交流センター), 2019年3月9日, 千葉県我孫子市本町3-2-1 アビィホール, 「嘉納治五郎から『平和』を学ぶ」, 参加者約200名, 嘉納治五郎(柔道創始者、アジア初国際オリンピック委員、体育・スポーツの父)の別荘が在った我孫子の地域住民を対象に、嘉納治五郎の海外における諸活動と彼の平和に対する思想について講演した。永木耕介
- (講習会)『2018年(平成30)度公認コーチ養成「ボート専門科目」講習会』, 2019年1月14日, 大阪府立漕艇センター(大阪府), テーマ:スポーツ心理学, 内容:ボートのコーチングライセンスの有資格者および新規資格取得者を対象にスポーツ心理学に関する講習を実施した。中澤史
- (セミナー)『平成30年度JFA日本サッカー協会S級講習会』, 2018年9月12日, 味の素ナショナルトレーニングセンター, テーマ:「サッカーとメディア, サッカー現場のコミュニケーション」, サッカーライセンスS級取得受講者20名を対象にして, サッカーとメディアの関係, サッカー現場の指導, 試合前後, 試合日の間のコミュニケーションの取り方を指導。山本浩
- (セミナー)『平成30年度JOCナショナルコーチアカデミー』, 2018年9月19日, 味の素ナショナルトレーニングセンター研修室1・2, テーマ:「コミュニケーション論・メディア論」, JOC専任コーチングディレクター及び平成30年度以降候補者20名, 平成30年度JOC強化スタッフを対象にして, コミュニケーションの基本的な考え方, メディアのあり方, 哲学, そこへの対応を講義とやり取りで行う。山本浩
- (セミナー)『筋力トレーニングの科学, パワーの科学』, 2018年7月16・19・22日, 法政大学(神奈川県), 本学硬式野球部を対象に筋力トレーニングおよびパワーの科学に関して基礎的理論から野球への応用までレクチャーした。森嶋琢真
- (セミナー)『東京メディカルスポーツ専門学校 同窓会』, 2018年9月24日, 東京都江戸川区, スポーツ選手の腰部障害へのアプローチ～評価と鍼灸治療を中心に～。泉重樹
- (セミナー)『相模原市体育協会 スポーツセミナー』, 2018年7月21日, 神奈川県相模原市, スポーツ現場における熱中症の対策と事後対応, 泉重樹
- (セミナー)『全日本鍼灸学会北海道支部講演会』, 2018年6月17日, 北海道札幌市, 「スポーツ領域における鍼灸治療」スポーツ現場に出る鍼灸師に知っておいていただきたいこと。泉重樹
- (シンポジウム)『履修証明プログラム開講記念シンポジウム』,
  - ・2018年12月9日(日) 13:30～16:30,
  - ・法政大学 市ヶ谷キャンパス 富士見ゲートG403 教室,
  - ・健康とスポーツ,
  - ・第3部 スポーツパートパネルディスカッション
  - ・本学にて教鞭をとる一方で, 各競技の日本連盟に所属して現役トップアスリートのサポートを行っている教員たちを集めて, スポーツの指導方法や健康維持に関するディスカッションを行う。
  - ・荻部 俊二 (スポーツ健康学部教授, 日本陸上連盟オリンピック強化コーチ)
  - 伊藤 マモル (法学部教授, 日本フェンシング協会コンディショニング科学部会部長)

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

熊谷先生（熊谷矯正歯科医院，予防歯科の権威者）

- （シンポジウム）『第20回応用薬理シンポジウム』，2018年8月3日 - 8月4日，大田区産業プラザPI0（東京都），  
テーマ：EPA 高含有魚油の筋運動効果に関する研究，越智英輔
- （シンポジウム）『地域スポーツシンポジウム』，2019年3月3日，立命館大学びわこ・くさつキャンパス・エポック立  
命21（滋賀県），テーマ：国民スポーツ大会・全国障害者スポーツ大会における地域の関わり方，内容：これまでの国民  
体育大会を通じて形成されたレガシーとその創出方法，滋賀県の総合型地域スポーツクラブ関係者を対象として，吉田  
政幸
- （シンポジウム）『日本認知・行動療法学会第44回大会』，2018年10月27日，明治学院大学（東京都），認知行動療法  
の実践におけるスポーツ領域の特異性，内容：「スポーツメンタルトレーニング指導士から見たアスリートの心理サポー  
ト」の発表を担当，主に認知行動療法の専門家を対象に実施。荒井弘和
- （シンポジウム）『第13回埼玉アスレチック・リハビリテーション研究会』，2018年10月27日，埼玉医科大学かわごえ  
クリニック（埼玉県），みんなで考えるオーバユース障害の予防と治療，内容：「受傷アスリートの胸の内」の発表を  
担当，主にアスレチック・リハビリテーションに関わる専門家を対象に実施。荒井弘和
- （シンポジウム）『東京体育学会第10回大会シンポジウム「今後の10年を見通す」』，2019年3月10日，東京大学教養  
学部，トレーニングする人を増やすには，体育学のオリジナリティと今後の東京体育学会の進むべき方向を示した，学  
会員約200名，平野裕一
- （シンポジウム・パネルディスカッション）『アシックスシンポジウム「低酸素トレーニングのすべて」』，2019年3月15  
日，早稲田大学井深記念ホール，低酸素トレーニングを競技力向上に活かす，競技団体と指導者の低酸素トレーニング  
に対するニーズを検討した，研究者+トレーニング指導者+測定関係企業者等で約300名，平野裕一
- （講演）『平成30年度 第1回静岡市中学校部活動指導者研修会「効率的・効果的な指導方法の在り方」』2018年6月7  
日 静岡市役所 清水庁舎 ふれあいホール，静岡市の中学校教員に対し，短時間での効果的なトレーニング方法の概  
念、具体的な計画方法などについて講演。杉本龍勇
- （講演）『平成30年度「東京都障害者スポーツ選手育成事業」育成プログラム「トレーニング概論」』  
2018年7月7日 平成帝京大学 中野キャンパス、パラアスリートを対象に、トレーニング方法の理論と具体的な内容  
について講演した。杉本龍勇
- （講演）『沼津市指導力向上研修「競技力向上のための指導とスポーツにおけるリスクマネジメント」』2018年10月31  
日 サンウェル沼津、競技力向上の効率化を目指すトレーニング計画や実施環境、怪我の防止といったリスク回避など、  
マネジメント方法について講演。杉本龍勇
- （講演）『沼津市指導力向上研修「明日から使える最新のトレーニング方法」』2018年11月21日  
サンウェル沼津、運動における支持局面の強化を中心とした具体的なトレーニング方法について講義。杉本龍勇

##### 5. コラム（新聞、刊行物）、テレビ出演、ラジオ出演

- （コラム）『スポーツ歴史の検証』～オリンピック・パラリンピックレガシーリレーコラム～，第5回西田善夫・第8回  
河西三省を担当，山本 浩，2018年，（公財）笹川スポーツ財団，ウェブサイト掲載，  
オリンピックで国民の目と耳に届いた放送の内、歴史を画すことになったスポーツアナウンサーの二人を取り上げ、そ  
の足跡とオリンピックへの貢献をコラムに書き下ろした。
- （コラム）『羅針盤』，山本 浩，2018年4月1日（同じく5月20日，7月1日，8月26日，10月13日，11月25日），  
山陰中央新報，「よく教えるべきか、否か」「伝わる日本流リスペクト」「情報戦を制した日本」「新たな制度導入に苦悩」  
「異文化理解深める必要」「競技スポーツの強い引力」  
スポーツ界に見聞きした情報をもとに、山陰中央新報読者にあてたスポーツ観をコラムで伝える。
- （コラム）『グッドコーチになるためのココロエ』，山本浩（部分），編著者：平野裕一，土屋裕睦，荒井弘和，2018年12  
月，培風館，  
ドイツ・ライプチヒ大学にサバティカ滞在中に研究した指導者論の中から、そのエッセンスをコラム形式で執筆、提出。
- （コラム）『今と昔を比較研究 最新トレーニング入門 最高のコンディションで試合に臨むためのピーキングとテーパリ  
ング』，泉 重樹，Athlete Vision 2018 #11. P9，2018-11
- （コラム）『無知は罪、常に知ろうとする気持ちを持つことが業界の底上げにつながる』，泉 重樹，Fitness Business.  
98，P114-115，2018-10
- （意見発表）『博物館への期待する資料収集と博物館のあり方』，独立行政法人日本スポーツ振興センタースポーツ博物  
館将来構想検討会議・第4回会議，2018年10月24日，日本スポーツ振興センター 本部事務所（東京都港区北青山

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

2-8-35), 山本 浩, 検討の始まっていた、秩父宮記念スポーツ博物館の新たなあり方をする検討会議に招かれ、これから先のスポーツ博物館のあり方と資料収集に関する考え方を過去の研究を元に、委員メンバーを前に披瀝する。

- (抄録集) 『主動作筋への円皮鍼刺激が拮抗筋の筋活動に及ぼす影響』, 鷲野哲平・大内晃一・泉 重樹, 全日本鍼灸学会学術大会抄録集 67回 P168, 2018.05 大阪市
- (コラム) 静岡新聞社 (朝刊) 時評. 『地域スポーツクラブ活性化』2018年5月23日、地域スポーツクラブを部活動の今後の代替環境とし、その際に各地域の体育協会がマネジメントの主導を握る事によって今後のスポーツ実施環境を充実させる方策について。杉本龍勇
- (コラム) 静岡新聞社 (朝刊) 時評. 『サッカーW杯の結果と経済』2018年7月19日、サッカーワールドカップロシア大会のスポンサー広告について状況を説明し、世界経済の動向と照らし合わせてメガスポーツイベントの広告としての役割について説明。杉本龍勇
- (コラム) 静岡新聞社 (朝刊) 時評. 『競技団体のガバナンス』2018年9月19日、近年発覚しているスポーツ競技団体のガバナンスにおける現状説明し、この課題解決に向けた対応策を紹介した。杉本龍勇
- (コラム) 静岡新聞社 (朝刊) 時評. 『指導者研修体制の刷新』2018年11月15日、働き方改革に伴う部活動指導の問題点に対し、効率化したトレーニング指導を学ぶ研修体制についての一案をしました。杉本龍勇
- (コラム) 静岡新聞社 (朝刊) 時評. 『大学スポーツの転換期』2019年1月30日、大学スポーツ協会の設立を契機に、大学スポーツがどのように変化するか、またその変化が社会にどのような影響を与えていくか、ということについて考えを示した。杉本龍勇
- (コラム) 静岡新聞社 (朝刊) 時評. 『スポーツツーリズム活性化』2019年3月28日、インバウンドの増加に伴い派生した地価の上昇を受け、スポーツツーリズムがどのように影響を与えているかを説明した。またスポーツツーリズムを地域活性化策として取り入れる際の留意点について意見を述べた。杉本龍勇
- (コラム) 『一歩先を行くフィジトレ』footies! solmeda、高校サッカー選手向けのフィジカルトレーニングを紹介している。杉本龍勇

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

・特になし

### ③研究成果に対する社会的評価 (書評・論文等)

※研究所 (センター) がこれまでに発行した刊行物に対して2018年度に書かれた書評 (刊行物名、件数等) や2018年度

氏名: 越智 英輔

2018年 引用件数

Researchgate: 67件

Google Scholar: 89件

氏名: 森嶋 琢真

※2018年度に引用された論文

『Carbohydrate Gel Ingestion Immediately before Prolonged Exercise Causes Sustained Higher Glucose Concentrations and Lower Fatigue』1件

『Impact of Exercise and Moderate Hypoxia on Glycemic Regulation and Substrate Oxidation Pattern』、3件

『4 Weeks of high-intensity interval training does not alter the exercise-induced growth hormone response in sedentary men』、6件

『Effect of sprint training: Training once daily versus twice every second day』、1件

『Compression Garment Promotes Muscular Strength Recovery after Resistance Exercise』、6件

『Effects of different periods of hypoxic training on glucose metabolism and insulin sensitivity』、3件

『Whole body, regional fat accumulation, and appetite-related hormonal response after hypoxic training』、4件

『Ghrelin, GLP-1 and Leptin Responses during Exposure to Moderate Hypoxia』、3件

『Augmented Carbohydrate Oxidation under Moderate Hypobaric Hypoxia Equivalent to Simulated Altitude of 2500 m』、1件

『Endothelial dysfunction following prolonged sitting is mediated by a reduction in shear stress』、14件

『Prolonged sitting-induced leg endothelial dysfunction is prevented by fidgeting』、13件

『Prior exercise and standing as strategies to circumvent sitting-induced leg endothelial dysfunction』、7件

『High-intensity resistance exercise with low repetitions maintains endothelial function』、1件

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

<p><b>【根拠資料】</b> ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <p>・特になし</p>
<p>④研究所（センター）に対する外部からの組織評価（第三者評価等）</p> <p>※2018年度に外部評価を受けている場合には概要を記入。外部評価を受けていない場合については、現状の取り組みや課題、今後の対応等を記入。</p> <p>2019年度に質保障委員会を開催し、外部からの評価を受ける予定。</p>
<p><b>【根拠資料】</b> ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <p>・特になし</p>
<p>⑤科研費等外部資金の応募・獲得状況</p> <p>※2018年度中に応募した科研費等外部資金（外部資金の名称、件数等）および2017年度中に採択を受けた科研費等外部資金（外部資金の名称、件数、金額等）を簡条書きで記入。</p> <p><b>【2018年度中に応募した科研費等外部資金】</b></p> <p>・日本私立学校振興・共済事業団 2019年度学術研究振興資金</p> <p><b>【科学研究費助成事業】</b> 合計 12 件</p> <p>・基盤研究（A） 1 件</p> <p>・基盤研究（C） 9 件</p> <p>・挑戦的研究（萌芽） 1 件</p> <p>・若手研究 1 件</p> <p><b>【科学研究費助成事業以外の公的研究費】</b> 合計 2 件</p> <p>・（公社）全日本鍼灸学会 2019—2021年度 研究助成 1 件</p> <p>・（公財）日本スポーツ協会 2019年度スポーツ医・科学研究事業 1 件</p> <p><b>【2018年度中に採択を受けた科研費等外部資金】</b></p> <p><b>【科学研究費助成事業】</b> 合計 6 件</p> <p>・基盤研究（C） 2 件</p> <p>・挑戦的萌芽研究 1 件</p> <p>・若手研究（B） 1 件</p> <p>・若手研究 1 件</p> <p>・国際共同研究加速基金（国際共同研究強化） 1 件</p> <p><b>【科学研究費助成事業以外の公的研究費】</b> 合計 2 件</p> <p>・（国研）国立がん研究センター 国立がん研究センター研究開発費の研究事業 1 件</p> <p>・（公財）日本スポーツ協会 2018年度スポーツ医・科学研究事業 1 件</p>
<p><b>【根拠資料】</b> ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <p>・特になし</p>

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
<p>・研究における所員間の協働。昨年度、所員の協働による包括的な研究テーマを決め、学術研究振興資金に申請した。</p>	

(3) 問題点

内容	点検・評価項目
<p>・ホームページの運用。更新頻度を増すため、活動状況等を掲載するように努める。</p>	

**【この基準の大学評価】**

<p>スポーツ研究センターでは、2018年度は研究・教育活動に関しては、10のプロジェクトが実施されている。個別スポーツについての科学的分析やスポーツ観戦者の研究、大学スポーツの大学ブランドに与える影響、スポーツ指導に関する研</p>
---

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。  
 ※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

究など幅広い分野がカバーされている。また体育会の強化プロセスに関するワークショップも行われている。対外的に発表された研究成果は書籍・論文等 67 点をはじめとして多数に上る。また研究成果に対する社会的評価においても、2018 年度に引用された回数が 63 回であり、高く評価できる。科研費等外部資金の応募・獲得状況は科学研究費が 6 件、それ以外の公的研究費 2 件と組織規模に比して多数に上り、この点においても高く評価することができる。なお、センターに対する外部からの組織評価については行われてはいないが、2019 年度よりセンター内に設置される質保証委員会が組織内の客観的立場からセンターの活動状況の評価を行う予定とされており、今後の成果に期待したい。

### III 2018 年度中期目標・年度目標達成状況報告書

No	評価基準	研究活動
1	中期目標	現在まで、各所員による個別の研究を進めてきた。今後は所員間の連携を深め、各所員の専門分野を活かした研究センターとして包括的な研究プロジェクトを起ち上げ、社会問題解決に貢献する研究を促進する。
	年度目標	研究センター内での勉強会やセミナーを開催し、各所員の研究についての理解を深めると同時に、意見交換を通じてまた新たなアイディアの創出に努める。そして、研究における連携及び相互作用について確認する。
	達成指標	研究センター内での勉強会およびセミナーの開催。また、共同プロジェクトの構築により、科研費等の外部助成金への申請を準備する。
	年度末報告	執行部による点検・評価
自己評価		S
理由		これまで行ってきた研究プロジェクト報告会以外に、セミナーを開催し、所員間の情報交換を促進した。また、2019 年度学術研究振興資金に研究センターとして応募した。
改善策	セミナーの開催頻度を増やしたい。また、2019 年度学術研究振興資金の応募において、学内審査は通過したが、応募団体の審査を通過することができなかった。そのため、計画を再検討して、改めてチャレンジをしたい。	
No	評価基準	社会連携・社会貢献
2	中期目標	現在まで継続している公開講座を今後も継続し、地域のスポーツ活動の活性化に努める。また体育会強化を通じて法政スポーツの活性化に努め、学生アスリートの競技力および社会人基礎力の向上を促し、大学のブランド力向上に貢献する。
	年度目標	法政スポーツが、競技力および社会性の両側面で高い評価を受けるように学生アスリートの強化・育成に励み、外部からの評価が向上するように努める。
	達成指標	SSI 科目として新設された「オリンピック・パラリンピックを考える」に複数の所員が登壇することで、センターの多様な研究成果を学生アスリートに還元する。
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価
自己評価		S
理由		例年通り、公開講座を開催した。また、SSI の公開科目「オリンピック・パラリンピックを考える」に所員が講師として登壇した。また SSI 受講生のみならず、多くの学生が受講した(受講者数 121 名)。
改善策	所員が講師を担当することで公開科目「オリンピック・パラリンピックを考える」の質の向上に貢献し、体育会学生のみならず、多くの学生にセンターの研究成果を還元すると共に、スポーツの社会的価値の向上に繋げたい。	
【重点目標】		
研究活動		
研究センター内での勉強会およびセミナーの開催は、年間 2~3 回を目標としたい。まずは任意で研究センター所員から参加者を募り、サロンの形でスタートしたい。また各回につき、発表テーマを 2 つ程度設け、それぞれの発表に対する議論を深めるように努める。そして次年度以降に外部からの研究者も招聘できるように形を整えたい。		
【年度目標達成状況総括】		
設定した目標は概ね達成することができ、研究センターとしての活動全般の活性化を促進することができた。しかし、センターとしての包括的な研究に対する外部資金の獲得はできなかったことが非常に悔やまれる。だが、センター所員間の相互		

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

協力や研究に対する情報交換はこれまでより活発となり、この体制を維持・発展させていくことが重要と捉えている。したがって、今後もセンター内での相互作用を活発化させ、研究に対する外部資金の獲得を目指して包括的に研究を促進したい。また、大学スポーツ協会（UNIVAS）への加盟に伴い、体育会に対する多方面からのサポートを強化し、競技面に対する支援すると共に、体育会学生のキャンパスライフ全体に対する支援も行い、大学のブランド価値向上に繋がるように貢献したい。

**【2018 年度目標の達成状況に関する大学評価】**

スポーツ研究センターとして、センター所員間の相互協力や研究に対する情報交換はこれまでより活発となり、この体制を維持・発展させていくことが重要と捉え、活動されている。研究プロジェクト報告会やセミナーを行い、さらに体育会以外の学生が参加できる公開講座の開催は、研究成果を還元するための取り組みであり、スポーツの社会的価値の向上への一層の貢献となることを期待したい。設定した目標は概ね達成することができ、研究センターとしての活動全般の活性化を促進することができたことは評価できる。センターとしての包括的な研究に対する外部資金の獲得はできなかったとのことで、今後も検討を加え再び外部資金の獲得に挑戦されたい。

**IV 2019 年度中期・年度目標**

No	評価基準	研究活動
1	中期目標	現在まで、各所員による個別の研究を進めてきた。今後は所員間の連携を深め、各所員の専門分野を活かした研究センターとして包括的な研究プロジェクトを起ち上げ、社会問題解決に貢献する研究を促進する。
	年度目標	研究センター内での勉強会やセミナーの開催頻度を上げ、各所員の研究についての積極的な意見交換を通じてさらに新たなアイデアの創出に努める。そして、研究における連携及び相互作用を創出する。
	達成指標	共同プロジェクトの構築により、科研費等の外部資金獲得を目指す。
No	評価基準	社会連携・社会貢献
2	中期目標	現在まで継続している公開講座を今後も継続し、地域のスポーツ活動の活性化に努める。また体育会強化を通じて法政スポーツの活性化に努め、学生アスリートの競技力および社会人基礎力の向上を促し、大学のブランド力向上に貢献する。
	年度目標	SSI のカリキュラムとして、昨年と同様に「オリンピック・パラリンピックを考える」が開講される。そこで 2020 年東京オリンピック・パラリンピックに向けて、競技以外の側面でも社会貢献できるよう教育内容の向上を図る。
	達成指標	法政スポーツの競技力および社会性の両面における外部からの評価が高まるよう、強化・育成に努める。

**【重点目標】**

研究活動における連携および相互作用の活性化により、外部資金の獲得を目指す。本年度も学術研究振興資金に応募する事を予定している。

**【2019 年度中期・年度目標に関する大学評価】**

スポーツ研究センターは 2019 年度に、従来各所員による個別の研究が主だったものを、今後は所員間の連携を深め、個々の専門分野を活かして包括的な共同研究プロジェクトを起ち上げ、社会問題解決に貢献する研究の促進を目指して、具体的に勉強会をスタートする予定である。各研究員の多数の論文や活発な研究実績を考えると、この共同研究によって大きな相互作用が期待できる。

社会貢献活動に関しても、「現在まで継続している公開講座を今後も継続し、地域のスポーツ活動の活性化に努める。また体育会強化を通じて法政スポーツの活性化に努め、学生アスリートの競技力および社会人基礎力の向上を促し、大学のブランド力向上貢献する」という目標が掲げられているが、これまでの法政スポーツが築いてきた実績があり、今後の日本社会全体がスポーツ化を目指すという大きな流れのなかで、貴センターの目標設定として適切である。

**【大学評価総評】**

調査研究、学生の健康維持増進、体育施設の運営など、スポーツ研究センターの従前からの任務に加え、近年は体育会

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

の強化、大学のイメージやプレゼンスの向上、社会や地域への貢献と還元などにも尽力されていると推察される。人的資源や予算も限られた厳しい環境下において、対外的に発表された研究成果は書籍・論文等 67 点をはじめとして多数に上る。また研究成果に対する社会的評価においても、2018 年度に引用された回数が 63 回であり、高く評価できる。科研費等外部資金の応募・獲得状況は科学研究費が 6 件、それ以外の公的研究費 2 件と組織規模に比して多数に上り、この点においても高く評価することができる。全体的にバランスの取れた運営のもと、今後の研究活動の連携と相互活性化という観点からの共同プロジェクト構築への取り組みは、貴センターの次の展開につながるものと思われる期待できる。

このような質・量ともに充実した研究・社会貢献活動について外部に発信するため、ホームページを充実したものにすることは貴センターの社会的プレゼンスを高めるために大変効果的だと考えられる。早期のホームページのバージョンアップが望まれる。

また、センターに対する外部からの組織評価については行われてはいないが、2019 年度よりセンター内に設置される質保証委員会が組織内の客観的立場から評価を行う予定とされており、今後の成果に期待したい。

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。